

# *The Well-Beloved* 論

——書き直しがもたらしたもの——

吉井浩司郎

## (1) 序論

トマス・ハーディが小説家としての円熟期にあり、また、彼の時代の一流の小説家の一人と目されている時期に、*The Well-Beloved* が創作されたことに疑問を呈する形で、Richard H. Taylor は、次のように述べている。

Since *Two on a Tower* marked the end of Hardy's prolonged period of experiment and innovation, and was succeeded by four novels of outstanding cast (*The Mayor of Casterbridge*, *The Woodlanders*, *Tess of the d'Urbervilles* and *Jude the Obscure*), the appearance of *The Well-Beloved* (in serial form) in 1892 as his penultimate full-length prose fiction was curious. By any standard *The Well-Beloved* is an oddity.<sup>1)</sup>

『塔上の二人』がハーディの実験と刷新の長い時期の終わりを告げ、その後のハーディの一流の作品群（『キャスターブリッジの町長』『森林地の人々』『ダーバーヴィル家のテス』『日陰者ジュード』）が続いた後であるだけに、『恋霊』の連載本がハーディ最後から二番目の長編小説として1892年に現れたのは不可解なことである。いかなる基準から見ても『恋霊』は不可解な作品と言うほかない。」

場合によっては、この作品はハーディ最後の小説の地位を持つ作品であるにも拘わらず、この作品を読んだ多くの読者が抱く感想は、上に引用したテイラーの感想とほぼ同じではなからう

か。

ハーディの小説家としての円熟期に *The Well-Beloved* のようなマイナーな作品が創作され出版されたことに関して、テイラーはこの作品の創作と出版の外的環境から説明がつく、と言う。すなわち、Tillotson が『テス』の出版をキャンセルしたことの埋め合わせに、ハーディに別の作品の連載を打診してきた際に、ハーディは“something light”を創作して連載するという契約にサインし、なおかつ、書評界に気に入られること（‘please Mrs. Grundy and her Young Person, and her respected husband, by its absolutely “harmless” quality’<sup>2)</sup>）を最優先して創作に当たったということなのである。言い換えるなら、『テス』の連載の際に削除・修正を多くの箇所ですらなくされ、また、『テス』の book version を出版するときに、削除・修正したものを再度元に戻すというあまりもの煩わしさに嫌気がさしたのだが、*The Well-Beloved* では同じ轍を踏むのを避けるため、無難・無害な作品にしようとしたようである<sup>3)</sup>。そうしてこの作品は、ハーディ小説の研究の流れの中では、あまり評価されない結果となっている。たとえば、ハーディ小説の初期の研究者の一人 Joseph Warren Beach のこの作品に関する評価を紹介すると、こうである。

It pretends indeed to be no more than “a sketch of a Temperament.” It is good fun—one of the playful recreation of genius.<sup>4)</sup>

と、この作品を「天才の手慰み」という程度にしか評価していないのである。

ところで、この作品の批評の流れについては、T. R. Wright が *Hardy and His Readers* の中で手際よくまとめているので<sup>5)</sup>、それを整理すると、以下となる。

この作品の発表直後の書評界の反応は、中には戸惑いを示すものもあったが、おおむね好意的であった。これは、ハーディが一流の小説家ということで彼に対する崇敬の念から来るところ大であったようだ<sup>6)</sup>。しかし、*the World* 誌のみが酷評したのである。ハーディがこの *the World* 誌の酷評に対して神経質になったのは、ハーディの既に確立している小説家としての名声に傷がつき、それが結果的に収入減につながるかもしれない、と心配したからだ、という。しかし、ハーディの友人の一人 Edmund Gosse が論陣を張ってハーディを弁護する書評を *St. James Gazette* 誌に発表したおかげで、それが引き金となって、ハーディを弁護する書評が続々と現れたのであった。初期の熱狂的にこの作品を擁護する書評のあと、比較的冷静な目でこの作品を見る時期に入ると、この作品はあまり評価されなくなり、ハーディ小説の研究の流れの中でも、その傾向が続き、他の小説家たちもこの作品をあまり評価しなかった。唯一この作品を評価したのがマルセル・プルーストであった。

20世紀に入ってから最初の75年間、*The Well-Beloved* を評価した批評家はほとんどいない。しかしながら、1975年に、やっと Hillis Miller が *The Well-Beloved* を評価したのである<sup>7)</sup>。以上が T. R. Wright が記述していることの一部の概略である。また、このヒリス・ミラーは、『小説と反復』の中でも、*The Well-Beloved* を詳細に論じているのである。そのタイトルは、‘*The Well-Beloved: The Compulsion to Stop Repeating*’<sup>8)</sup>で、これは、Wessex 版の Introduction を元にして、議論を発展させたものなのである。

また Jeremy Steele がこの作品の研究史上画期的な業績として評価した<sup>9)</sup>Penguin Classics の *The Pursuit of the Well-Beloved and The Well-Beloved* の編者 Patricia Ingham は、この版の“Introduction”<sup>10)</sup>の中で、T. R. Wright と同様に、この作品がハーディ研究の流れの中で、軽視されてきた作品であり、1970年代に入ってようやく、John Fowles の ‘Hardy and the Hag’<sup>11)</sup>と J. Hillis Miller の ‘*The Well-Beloved: The Compulsion to Stop Repeating*’ によって、この作品の研究に火がつけられた、と指摘している。

事実、ここに一々具体例を挙げないが、この作品に関する主だった研究はこのヒリス・ミラーの研究以降に続々と出てきているのである。とは言え、ハーディ小説の研究全体の中では、この作品はマイナーな作品として扱われているに過ぎない。

マイナーな作品であることは認めるとして、さてそれでは、この作品はどのような読解が可能なのだろうか。

この小論においては、この作品が連載本から book version に書き直される際に大幅に変更されている点と、この作品がハーディの自伝的要素をふんだんに含む点とに着目することによって、どのような解釈が可能かを検討してみたい。

## (2) 連載本から book version へ

この作品は元々 *The Pursuit of the Well-Beloved* というタイトルで、*the Illustrated London News* の1892年10月1日号から12月17日号まで12週に亘って連載された<sup>12)</sup>。そしてその後、1897年3月に *The Well-Beloved* というタイトルで book version が出版されたのである。通例ハーディは、連載が終わるか終わらぬうちに book version を出版するのだが<sup>13)</sup>、この作品の場合、連載が終了してから実に4年以上の歳月を隔てて book version を出版しているのであるが、それは何故なのだろうか。

Richard Taylor<sup>14)</sup>と Richard Little Purdy<sup>15)</sup>とはハーディが連載本の内容に満足できなかったからだと言っているが、理由はそれだけではないと筆者は考えている。つまり、ハーディの側に何らかの事情があったのであって、それが一体何であるのか今しばらく検討してみよう。

連載本では book version にはない主人公 Pearston<sup>16)</sup>と Marcia とが衝動的に結婚してしまって、4年の結婚生活を送ったというストーリーになっている。しかも連載本には、一度結婚してしまうと二度と離婚できないという当時の結婚制度に対する批判も含まれていたのである。少し長くなるが引用してみよう。

Thus it began and continued in the home of these hastily wedded ones. Sometimes it was worse, far worse, than a hot quarrel. There was a calm, cold reasoning in their discussions, and they talked in complete accord of the curse of matrimony. In their ill-matched junction on the strength of a two or three days' passion they felt the full irksomeness of a formal tie which, as so many have discovered, did not become necessary till it was a cruelty to them.

A legal marriage it was; but not a true marriage. In the night they heard sardonic voices and laughter in the wind at the ludicrous facility afforded them by events for taking a step in two days which they could not retrace in a lifetime, despite their mutual desire as the two persons solely concerned.

Marcia's haughty temper unfolded in the direction of irascibility when she beheld clearly in what a trap she had been ensnared. She was her husband's property, like one of his statues that he could not sell. "Was there ever anything more absurd in history," she said bitterly to him one day, "than that grey-headed legislators from time immemorial should have gravely based inflexible laws upon the ridiculous dream of young people that a transient mutual desire for each other was going to last for ever!"<sup>17)</sup>

上記の引用になる前の経緯について説明を加えておこう。

二人が結婚して8週間、新婚旅行として大陸旅行からロンドンのピアストンのアパートに戻ってくると、大量の手紙類が貯まっている。その中に、マーシアの両親からマーシア宛に、Rivera 地方とイタリアに行つて冬を過ごす旨の手紙があった。マーシアはピアストンと結婚していなければ、両親と一緒に海外旅行できていたのに、と言う。

また、マーシアの恋人から、彼女に結婚を申し込みに行く途中だ、という趣旨の手紙もあった。その男に、断りの手紙をマーシアはピアストンの手助けの元書いているさなかにも、夫婦喧嘩となる。

ロミオとジュリエットのように、互いに敵対する商売敵同士の子供が結婚したのであるか

ら、最初からこの結婚はうまくいかないのは当然で、ピアストンはマーシアの父親の悪口を言って、そのことを巡って再び夫婦喧嘩となる。

このように、一時の感情に支配されて結婚し、永久にその結婚の束縛に繋がれる二人の結婚を通して、先ほど引用した結婚制度批判が連載本には含まれていたのである。

ハーディ自身はどこにも語っていないが、この結婚制度批判は不十分にしか展開されていない、と考えていたのではないか、と思われる。つまり、がっちりしたストーリーの中で結婚制度批判をする必要がある、とハーディは考えたのではないのか。それが *Jude the Obscure* へと結実したのではないのか、と考えられる。

従って、*The Pursuit of the Well-Beloved* の連載終了後に *Jude the Obscure* 制作に取りかかり、*Jude the Obscure* の出版が終わった後、連載本の *The Pursuit of the Well-Beloved* を書き直して book version の *The Well-Beloved* を完成させたというわけである。

連載本と book version との最も大きな異動は、ピアストンとマーシアとの結婚の有無と結末部分である。

それでは何故連載本を book version にする際に、ハーディはピアストンとマーシアとの結婚を削除したのだろうか。それは、*Jude the Obscure* において結婚制度批判は十分になされたのであって、*The Well-Beloved* においてはもはや結婚制度批判はなされる必要がなくなったからなのである。もしも、*The Well-Beloved* においてピアストンとマーシアとの結婚および結婚制度批判をそのままにしておいたとしたら、それこそ tautology (同語反復) になってしまうのである。

連載本から book version に書き直されるときに、この他、どのような変更が加えられているかを見てみよう。

連載本の Part First の Chapter 1 Relics が完全に削除されている。この冒頭の章では、ピアストンのそれまでの恋愛の痕跡を示す様々な女性たちから送られてきた love letters を焼却しようとする場面が描かれている。従って、その後の各章ではこの love letters に関連する箇所が削除されている。

次に、先ほど述べたように、結末部分が全く異なることである。Part Third の最後の 7 章がすべて書き直されて、book version では 4 章になっているのである。例えば、以下に Part Third の章題を対照してみよう。書き直されているのは連載本の XXVII He Desperately Clutches the Form 以降である。下の表では二重線以降である。

連載本の章題	book version の章題
XXIII She Returns for the New Season	I She Returns for the New Season
XXIV Misgivings on this Unexpected Re-embodiment	II Misgivings on the Re-embodiment
XXV The Renewed Image Burns Itself In	III The Renewed Image Burns itself in
XXVI He Makes a Dash for the Last Incarnation	IV A Dash for the Last Incarnation
XXVII He Desperately Clutches the Form	V On the Verge of Possession
XXVIII He Possesses it: He Possesses it Not	VI The Well-Beloved—Where?
XXIX The Elusiveness Continues	VII An Old Tabernacle in a New Aspect
XXX He Becomes Retrogressive	VIII ‘Alas for this Grey Shadow, once a Man!’
XXXI The Magnanimous Thing	
XXXII The Pursuit Abandoned	
XXXIII He Becomes Aware of New Conditions	

連載本と book version それぞれの結末がいかに異なっているかについては後で具体的に検討することとして、以上見てきた所から明らかなように、ヒリス・ミラーはこの作品を *double ending* を持つ一つのテキストと見なしているけれども<sup>18)</sup>、Patricia Ingham が指摘しているように<sup>19)</sup>、連載本と book version とは別々の作品だと見なすべきだろう。

### (3) 作品のテーマ

前節では、連載本と book version とが別々の作品であることを具体的に見たのだが、連載本から book version に書き直されることによって、何がもたらされたというのだろうか。

結論を先に言ってしまうと、作品の主題がより鮮明な形で提示されることになった、ということである。つまり、余分なものが削ぎ落とされて、一人の彫刻家が永遠の女性というプラトンの言う「アイデア」を求め続けるという主題である。

主人公は the Isle of Slingers (石投げ人の島) 出身の Jocelyn Pierston という男性彫刻家であり、物語は彼がロンドンから彼の出身のその島に帰郷するところから始まっている。彼が、彼の友人であり風景画家の Sommers (サマーズ) に語る場所に拠れば、

‘I am under a curious curse, or influence. I am posed, puzzled and perplexed by the legerdemain of a creature—a deity rather; by Aphrodite, as a poet would put it, I should put it myself in marble.’<sup>20)</sup>

と、the Well-Beloved のアイデアを求め続けるという呪いに呪縛されているというのである。

さらにピアストンがサマーズに語るところに拠れば、この the Well-Beloved は一人の女性の肉体に永遠に留まり続けるのではなくて、次から次へと女性の肉体の中を移り、移動していくというのである。最初はピアストンが9歳のとき、亜麻色の髪を持つ8歳の少女であり、それから次に、Budmouth-Regis で出会った若い女性、次に、子供を連れた若い女性というふうに、ピアストンは彼にとって今まで the Well-Beloved が宿った女性を紹介する。

ここで我々は the Well-Beloved が一体どのような存在であるのかを、ハーディの同題の詩“The Well-Beloved”（「恋の精髓」）の一節を参考として、考えてみよう。以下に、the Well-Beloved が一人の女性に恋する若い男性に語る次の一節を英語<sup>21)</sup>と森松健介氏による日本語訳<sup>22)</sup>とを引用してみよう。

The sprite resumed: ‘Thou hast transferred  
To her dull form awhile  
My beauty, fame, and deed, and word,  
My gestures and my smile.

‘O fatuous man, this truth infer,  
Brides are not what they seem;  
Thou lovest what thou dreamest her;  
I am thy very dream!’

精はまた言い足した「あなたはただあの娘さんの  
つまらぬ姿にしばらくだけ  
わたしの美と名声 行為と言葉 しぐさと笑みを  
乗り移らせたに過ぎないのよ

「まあ おめでたい愚かな男、この真理を押し測れ  
花嫁なんて見るとおりのものじゃないのよ  
あなたは彼女に夢見てるものを愛しているの  
わたしこそあなたの夢そのものよ！」

すなわち、the Well-Beloved とは、理想の女性のアイデアとどういうものの、男性の内なる欲望の投影に過ぎないのである。ピアストンはこのことに気づかぬまま、the Well-Beloved が乗り移っ

たと彼が感じる女性を求め続けるのである。むしろピアストンは the Well-Beloved がその背後から Aphrodite によって操られる存在だと考えているのである。

In this he was aware, however, that though it might be now, as heretofore, the Loved who danced before him, it was the Goddess behind her who pulled the string of that Jumping Jill. (p. 79)

この作品は、そのようなピアストンの姿を3つのパート、すなわち、Part First: A Young Man of Twenty、Part Second: A Young Man of Forty、Part Third: A Young Man of Sixty に分けて描いており、このパート分けも、また、それぞれのパートにおける女主人公も同一の名を持つ Avice the First、Avice the Second、Avice the Third という具合に甚だ機械的で、幾何学的な構成である。但しここで確認しておかなければならないのは、ピアストンにとって the Well-Beloved が宿った女性は、エイヴィス一世、二世、三世の母、娘、孫という同名の三人の女性だけではない、ということである。

それでは、何故このようにいかにも作り物という印象を与えかねない構成になっており、しかも、同名の三人の女性を相手とする物語構成になっているのか？ それは、the Well-Beloved の顕現である Avice へのピアストンの囚われの有様を強調するためである。それでは何故ピアストンの Avice への囚われを強調する必要があるのか？ これについては節を改めて検討しよう。

#### (4) この作品における自伝的要素

By imperceptible and slow degrees the scene at the dinner-table receded into the background, behind the vivid presentment of Avice Caro, and the old, old scenes on Isle Vindilia which were inseparable from her personality. The dining-room was real no more, dissolving under the bold stony promontory and the incoming West Sea. (p. 86)

気づかないほど徐々にディナー・テーブルの場面が後退して背景となり、エイヴィス・ケアローとヴィンディリア島の昔の数々の場面が立ち現れた。それらの場面は彼女の存在と不可分のものなのだ。ダイニング・ルームはもはや現実のものではなく、切り立った岩の岬と満ち潮のウェスト・シー（西の海）の風景の背後に消え失せていった。



上掲の引用は第2部第3章の章頭の場面であり、ピアストンの父が昔雇っていた男の妻からの手紙を読んだピアストンの身に起こった心象風景を描写したものである。その手紙は手紙の差出人がピアストンに差出人の息子の就職の斡旋を依頼する手紙であったが、ピアストンの注意を引いたのはその手紙の最後に書かれた記述である。それは、エイヴィス・ケアローすなわちエイヴィス一世の死を知らせるものであった。彼女はピアストンに捨てられた後、彼女の従兄弟と結婚して長い間島を離れていたが、寡婦となって今から1年前に島に戻ってきたのだが、それ以来徐々に元気がなくなりついには亡くなった、というものであった。エイヴィスの死を知らせる手紙を読んだ直後、ピアストンが招待されて来ているパーティの場面が、ピアストンにとって非現実化し、エイヴィスと過ごした島の数々の場面、否、エイヴィスその人の姿そのものがピアストンの眼前に幻視化され、現実化されていく。視覚化の技法を得意とするハーディの面目躍如たる描写であるが、私はそのような技法そのものに注目しようというのではない。

この場面の描写は、ハーディが Tryphena Sparks (トライフィーナ・スパークス) の死の知らせを受けたときの体験が基になっている、と John Fowles が指摘していること<sup>23)</sup>に注目したいのである。つまり、数々のハーディ研究者たち<sup>24)</sup>が指摘していることだが、この作品ほどハーディの自伝的要素が盛り込まれているハーディ小説はない、ということなのである。エイヴィス一世の描写のその向こうにハーディがトライフィーナ・スパークスを幻視しているのではないのかという印象を抱く読者は私一人だけではあるまい<sup>25)</sup>。

トライフィーナ・スパークスといえば、ハーディがエマ・ラヴィニア・ギフォードと出会う前に、どういう理由かは分からないが、別れた恋人であり、従姉妹であった。ハーディにしてみれば永遠のマドンナと言うべき女性であった。エイヴィス一世、エイヴィス二世、エイヴィス三世のその向こうにハーディはトライフィーナ・スパークスを見ているのではないだろうか。

確かに、作品のストーリーは、一人の彫刻家が永遠の女性のアイデアが乗り移った女性を求め続けるという単純なストーリーであり、永遠の女性のアイデアが乗り移るその具体的な女性は例えばエイヴィス一世、エイヴィス二世、エイヴィス三世という母、娘、孫という同じ顔を持つ女性たちであり、エイヴィス三世に至ってはピアストンと40歳の年齢差がある、という具合で、それだけの年齢差のある男女の間で恋愛が果たして可能かという疑問が出てくるというふうに、まったくリアリズムを無視したストーリーだ、と言わなければならない。つまりこの作品は、小説のリアリズムを無視して、作者のある思いが仮託された作品だと理解すべきであり、また、主人公の恋愛の対象が同じ名を持ち、同じ顔を持ち、その恋愛の行くへに多少のヴァリエーションがあるだけの物語に過ぎないのである。

それ程までに、作者ハーディはエイヴィス一世否トライフィーナ・スパークスにとりつかれ

ていると言うべきだろう。

ここで、トライフィーナ・スパークスの死の知らせを受けたハーディが創作した詩“Thoughts of Phena”<sup>26)</sup>(フィーナへの思い)を森松健介氏の訳<sup>27)</sup>と共に、引用してみよう。

38 *Thoughts of Phena*  
*At News of Her Death*

Not a line of her writing have I,  
Not a thread of her hair,  
No mark of her late time as dame in her dwelling, whereby  
I may picture her there;  
And in vain do I urge my unsight  
To conceive my lost prize  
At her close, whom I knew when her dreams were upbrimming with light,  
And with laughter her eyes.

What scenes spread around her last days,  
Sad, shining, or dim?  
Did her gifts and compassions enray and enarch her sweet ways  
With an aureate nimb?  
Or did life-light decline from her years,  
And mischances control  
Her full day-star; unease, or regret, or forebodings, or fears  
Disennoble her soul?

Thus I do but the phantom retain  
Of the maiden of yore  
As my relic; yet haply the best of her—fined in my brain  
It may be the more  
That no line of her writing have I,  
Nor a thread of her hair,  
No mark of her late time as dame in her dwelling, whereby

I may picture her there.

March 1890

フィーナへの思い (Thoughts of Phena, 38)

彼女の訃報に接して

彼女の書いた文<sup>ふみ</sup>ひと文字、髪ひと筋

私は持ってはいない。また私は

婚家<sup>こんか</sup>での彼女の姿を思うよすがになるような 家庭の主婦としての

彼女の晩年の形見も何ひとつ持っていない

だから 彼女の夢が光であふれ、彼女の眼が

笑いであふれていた頃に私が見慣れていた

私の失われたこの宝物の臨終の姿を 思い描けと 私の無<sup>アンサイト</sup>視覚に

命じてはみるものの、所詮 それは無理

どのような情景が その最後の日々に繰り広げられたのか

悲しみなのか 光輝か それとも薄闇か？

ひとに贈物をしたり同情したりするとき 彼女の愛らしい仕草には

金色の 輝きとアーチのある 後光が射しただろうか？

それとも彼女の年月からは 生命の光が弱くなり

満月状に至った彼女の昼の星を 災厄が

支配したのか？ 不安、悔恨、凶事の兆し、恐れなどが

彼女の魂の高貴を奪ったのだろうか？

このように私は 往昔の乙女の幻影のみを

自分用の遺品として保持しているが

しかしひょっとしたらそれは一私の胸にだけ秘蔵された 彼女の

遺品の最良品かもしれぬ、他の遺品がないのだから

なおさら最良、彼女の書いた文ひと文字、髪ひと筋

私は持ってはいないから。また私は

婚家での彼女の姿を思うよすがになるような 家庭の主婦としての

彼女の晩年の形見も何一つ持っていないから

1890年3月

以上からご理解頂ける通り、トライフィーナ・スパークスへのハーディの囚われがそのままエイヴィス一世に対するピアストンの囚われに反映されていることが分かるだろう。そして、ピアストンがエイヴィス一世の墓参りに「石投げ人の島」に戻った際に、エイヴィス一世の生き写しの若い女性がエイヴィス一世の娘であることを知り、徐々に心奪われていくのだが、Part Second Chapter Six の章題 *The Past shines in the Present* が示すとおり、ピアストンはエイヴィス二世の上にエイヴィス一世を重ね合わせて見ているのである。言い換えれば、ピアストンがエイヴィス二世に心を奪われているということは、彼がエイヴィス一世に心を奪われていることに等しいのである。

ところで、ピアストンのエイヴィス二世への愛には、*fetishistic* なところを感じられる。例えば、*Sylvania Castle* の他の使用人たちと話をしているときのエイヴィス二世の声の抑揚にくぎ付けにされるほど引きつけられたり (p. 107)、日曜日の教会で、エイヴィス二世に知られないように後をつけて、教会の中で彼女からは見えないところに席をとって、“*Engaged in the study of her ear and the nape of her white neck*” したり (p. 107)、という具合である。後の例では、ピアストンはストーカー的な様相すら呈している。これらは、ピアストンのエイヴィス二世へ、いや、エイヴィス一世への囚われの強さを強調しているに過ぎないのである。エイヴィスたちへのピアストンの愛に、*fetishistic* なところがあるのは、エイヴィス二世に対してのみではない。エイヴィス三世に対する愛にも *fetishistic* なところが観察されるのである。

例えばこうである。ピアストンがエイヴィス二世に招かれて、エイヴィス二世、三世母娘に会いに、「石投げ人の島」に戻ってきたときに、まだエイヴィス三世と知らずに彼女に次のような出会いをする。崖下で助けを呼ぶ声を耳にしたピアストンは、ブーツを石と石との間に挟まれて身動きのできない若い女性を助け出し、その彼女を家まで送り届けたときにそれがエイヴィス三世だと知る運びになる。そのエイヴィス二世、三世母娘の家を辞去した後、ピアストンは先ほどエイヴィス三世を助けた現場に戻って、石と石との間に挟まって残されたブーツを何とか取り出して、懐に入れて、宿まで戻る。ブーツを取り出して懐に入れて持ち帰るという行動が *fetishistic* でないなどと言えるだろうか。

それでは、ピアストンのエイヴィスたちに対する *fetishistic* なところ、ストーカー的なところは、ピアストンの一体何を示しているというのだろうか。それは、まさしく、ピアストンのエイヴィスへの囚われの強さを示すものに他ならず、ハーディのトライフィーナ・スパークスに対する囚われの強さを示唆するものに他ならない。

第(3)節の最初のところで、この作品の主題は一人の彫刻家が永遠の女性というプラトンの言う「アイデア」を求め続けるということだ、と述べたが、作者の狙いが作品の主題とは別物であることも事実であり、筆者には、この作品におけるハーディの狙いがトライフィーナ・スパークスへの囚われから解放される様を扱った作品だと思われるのである。

それが、三世代に亘るエイヴィスたちとの関わりを通して描かれているのである。

エイヴィス一世はピアストンとの逢い引きの約束をすっぽかすことで、ピアストンの心の中から、the Well-Belovedの資格を喪失し、ピアストンが彼女を捨てるという結果になるが、エイヴィス一世を捨てた過去の償いとしてエイヴィス二世に引かれて求婚するが、その彼女が秘密の結婚をしていたことで、ピアストンのthe Well-Belovedの顕現であるエイヴィス二世との合一の願いは成就せず、ピアストンのその願望の行く末が作品のPart Thirdで扱われるのであるが、その際に、トライフィーナ・スパークスへの囚われからの解放というハーディの密かな願望が成就されるのである。それでは、節を改めて、具体的に見てみよう。

## (5) 書き直しをもたらしたもの

第(2)節において、連載本から book version に書き直されることによって、この作品が全く別の作品になったことを見たのだが、その際、結末の変更についてはまだ検討していない。そこで、いよいよ、結末の異動を具体的に見ることによって、この作品におけるハーディの狙いを見極めることにしよう。

書き直されることによって、この作品の主題が鮮明になり、その主題とは、一人の彫刻家が永遠の女性というプラトンの言う「アイデア」を求め続けるという主題だということ、第(3)節において具体的に検討した。しかし実は、その主題を描く背後にはハーディの個人的な狙いが潜まされていたのであって、これから、その点を見ていこう。

連載本では、ピアストンはエイヴィス二世の協力もあってエイヴィス三世との結婚が成就する。しかし、エイヴィス三世が別の男を愛している事実を知ったピアストンは、自分がこの世からいなくなれば、エイヴィス三世がその男と結婚できると思い、自殺をはかる。しかし、それは未遂に終わり、自殺未遂の後遺症で眼病を患い、病の床に就く。ピアストンを看病してくれているのが40年前に別居した妻のマーシアであることをピアストンは知る。そして、ついに医者への許可がおりて、ピアストンは陽光の中のマーシアを見る。美しく堂々としていたマーシアの姿はどこにもなく、しわくちゃになった老婆であった。すなわち、

An unexpected shock was the result. The face which had been stamped upon his

mind-sight by the voice, the face of Marcia forty years ago, vanished utterly. In its place was a wrinkled crone, with a pointed chin, her figure bowed, her hair as white as snow. To this the once handsome face had been brought by the raspings, chisellings, stewings, bakings, and freezings of forty years. The Juno of that day was the Witch of Endor of this. (p. 167)

そして作品最後の締め括りが以下である。

His wife was—not Avice, but that parchment-covered skull moving about his room. An irresistible fit of laughter, so violent as to be an agony, seized upon him, and started in him with such momentum that he could not stop it. He laughed and laughed, till he was almost too weak to draw breath.

Marcia hobbled up, frightened. “What’s the matter?” she asked; and, turning to a second nurse, “He is weak—hysterical.”

“O—no, no! I—I—it is too, too droll—this ending to my would-be romantic history!” Ho-ho-ho! (p. 168)

「『いやいや、違うのだ。あ、あ、あまりにも滑稽なのだ。つまりその、私のいわゆるロマンチックな経歴の結末としては。』は、は、は。」という語り手の冷笑的な笑いで、この作品に結末を付けたことは、この作品のテーマそのものが茶番であったとして、この作品を根底から否定しかねない終わり方なのである。

しかもここで、John Fowles が指摘していること<sup>28)</sup>を想起すれば、これ程皮肉たっぷりな結末はないことになってしまう。

つまり、彼自身小説家であり、また、ハーディの後継者であると自任する<sup>29)</sup>John Fowles は彼の論文“Hardy and the Hag”の中で、小説家という観点から、ハーディの創作者としての創作の内面分析をし、Marcia の中に Emma を読み込み、Avice の中に Tryphena を読み込んで、*The Well-Beloved* の中に伝記的要素が創作の素材として使われているのを分析しているのだが、彼の議論を下敷きにして、この結末を読めばこうなるだろう。〈自分は、トライフィーナ・スパークスの中に永遠の女性のアイデアを求めろロマンチックな旅を送ってきたけれど、その願いが叶わず、自分のそばには老婆のようなエマ・ギフォードしかいないことよ。なんと皮肉なことだ。〉ということを言外に語る結末になってしまうのである。このような読解を可能とするような結末をハーディは残すことはできなかった。従って、book version に書き直す際に、

ハーディが結末を書き換えたのは、当然と言えば当然のことだろう。

それでは、ハーディはどのような結末に書き換えたかを見てみよう。

上記の部分について、book version では、ピアストンとエイヴィス三世との結婚式前夜、エイヴィス三世は彼女の昔の恋人アンリ・ルヴール (Henri Leverre) と駆け落ちし、スリンガー島から小舟で脱出を図る。この場面は連載本におけるピアストンの自殺未遂の描写がそっくりそのまま利用されている。自分の娘の駆け落ちの事実を知らされたエイヴィス二世は心臓発作を起こして亡くなる。そして、そのエイヴィス二世の葬儀の日は、秋の横殴りの雨が降り、その葬儀を取り仕切っていたピアストンはびしょ濡れになって、大風邪を引き、それが元で数週間の間、ロンドンの自宅で生死の境を彷徨うほどの大病の床に就く。

日が経つにつれて、ピアストンの体力も回復し、意識を取り戻したピアストンは自分を看病してくれているのが40年前に喧嘩別れしたマーシアであることを知る。また、駆け落ちした二人が見舞いに来てくれていたこともマーシアから聞かされる。

病气から回復したピアストンは美への囚われから解放され、マーシアと結婚するのだが、語り手は、ピアストンが美への囚われから解放された証しとして以下のように描いている。

ピアストンは体力が戻ってから、マーシアに自分を自分のスタジオに連れて行かせる。すると、そこの彫像たちに対するピアストンは、露程も親近感も興味も感じないのであった。この変わり様を、マーシアは、“Jocelyn—this is sad.”と言うが、それに対してピアストンは、“No—not at all.” (p. 202) と言って、むしろ解放として喜んですらいる。

また別の午後には、ピアストンとマーシアとは、the National Gallery に行く。それは、“to test his taste in paintings, which had formerly been good” するためであった。そしてピアストンは、イタリア・ルネッサンスの Perugino、Titian、Sebastiano らの絵画や彫刻を見ても、何ら感銘を受けなかったのである。その時の二人の会話を以下に引用してみよう。

‘It is strange!’ said she.

‘I don’t regret it. That fever has killed a faculty which has, after all, brought me my greatest sorrows, if a few little pleasures. Let us be gone.’

He was now so well advanced in convalescence that it was deemed a most desirable thing to take him down into his native air. Marcia agreed to accompany him. ‘I don’t see why I shouldn’t,’ said she. ‘An old friendless woman like me, and you an old friendless man.’

‘Yes. Thank Heaven I am old at last. The curse is removed.’ (p. 202)

そして、以下が作品最後のパラグラフである。

At present he is sometimes mentioned as ‘the late Mr. Pierston’ by gourd-like young art-critics and journalists; and his productions are alluded to as those of a man not without genius, whose powers were insufficiently recognized in his lifetime. (p. 206)

女性美のアイデアを探求せざるを得ないという呪いから解放されたピアストンの上に、小説創作の束縛から解放されたハーディを読み込んで、ハーディにとってこの作品が小説創作への決別の書である、と Gerber とか T. R. Wright<sup>30)</sup> は指摘するのだが、それに対して Richard H. Taylor<sup>31)</sup> は読み込みすぎだと反論する。

しかしこの小論で、この作品におけるハーディの自伝的な要素に着目して読解してくると、ピアストンの美への囚われからの解放は、ハーディにとってのトライフィーナ・スパークスへの囚われからの解放を示唆している、と読めるのではなからうか。“*Thoughts of Phena*” がトライフィーナ・スパークスに対するハーディの惜別の詩であったとするなら、*The Well-Beloved* はトライフィーナ・スパークスに対するハーディの惜別の小説である、と言えるのではなからうか。

## 注

- 1) Richard H. Taylor, *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1982), p. 147.
- 2) Carl J. Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1965), p. 195.  
Richard Little Purdy and Michael Millgate, eds., *The Collected Letters of Thomas Hardy*, vol. 2 (Oxford: The Clarendon Press, 1978), p. 157.
- 3) Richard H. Taylor, *op. cit.*, pp. 149–150.
- 4) Joseph Warren Beach, *The Technique of Thomas Hardy* (New York: Ressel & Russell, First Published in 1922, Reissued, 1962, by Ressel & Russell), p. 133.
- 5) T. R. Wright, *Hardy and His Readers* (Houndmills, Basingstoke, New York: Palgrave Macmillan, 2003), pp. 202–212.
- 6) Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (London: The Bodley Head Ltd., 1971), p. 294.
- 7) J. Hillis Miller, “Introduction” to *The Well-Beloved* of the New Wessex Edition of 1975 (London and Basingstoke: Macmillan Press Ltd.).
- 8) J. ヒリス・ミラー、『小説と反復』（玉井暉他9名訳、英宝社、1991年）、pp. 209–252.
- 9) Jeremy V. Steele, “Plato and the Love Goddess: Paganism in Two Versions of *The Well-Beloved*”, Keith Wilson (ed.),



- Thomas Hardy Reappraised: Essays in Honour of Michael Millgate* (Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press, 2006), p. 199.
- 10) Patricia Ingham, “Introduction” to *The Pursuit of the Well-Beloved and The Well-Beloved* (Penguin Classics, 1997).
- 11) John Fowles, “Hardy and the Hag,” Lance St. John Butler (ed.), *Thomas Hardy After Fifty Years* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1977), pp. 28–42.
- 12) R. L. Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (Oxford: The Clarendon Press, First Published in 1954, Reprinted in 1968 and 1978), p. 95.
- Patricia Ingham, *op. cit.*, p. xvii.
- Carl J. Weber, *op. cit.*, p. 196.
- ただ一人 Richard H. Taylor (Richard H. Taylor, *op. cit.*, p. 150) のみが12月7日号までとしているが、これは Taylor の勘違いだと思われる。
- 13) ハーディ小説が連載本として出版された雑誌、号数、年月、また、book form で初版が出版された年月、出版社等についての情報は、R. L. Purdy の前掲書に詳しい。
- 14) Richard H. Taylor, *op. cit.*, p. 50.
- 15) R. L. Purdy, *op. cit.*, p. 95.
- 16) 連載本では Pearston という綴りが、book version では Pierston に改められている。
- 17) Patricia Ingham, *op. cit.*, p. 39. 連載本に関する引用はすべてこの版からであり、以下頁数は引用等に続けて括弧に入れて示す。
- 18) J. ヒリス・ミラー、『小説と反復』、pp. 219–220.
- 19) Patricia Ingham, *op. cit.*, p. xxvii and p. xxxvi.
- 20) Thomas Hardy, *The Well-Beloved* (London and Basingstoke: Macmillan Press Ltd., 1975), p. 53. *The Well-Beloved* に関する引用はすべてこの版からであり、以下頁数は引用等に続けて括弧に入れて示す。
- 21) James Gibson (ed.), *The Complete Poems of Thomas Hardy* (London and Basingstoke: Macmillan London Ltd., 1976), p. 134.
- 22) 森松健介訳、『トマス・ハーディ全詩集 I』(中央大学出版部、1995年)、p. 112.
- 23) John Fowles, *op. cit.*, p. 38
- 24) Peter J. Casagrande, *Unity of Hardy's Novels: 'Repetitive Symmetries'* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1982), p. 155.
- 25) Lois Deacon and Terry Coleman, *Providence and Mr. Hardy* (London: Hutchinson & Co. Ltd., 1966), pp. 121–139.
- John Fowles, *op. cit.*, pp. 28–42.
- 26) James Gibson(ed.), *op. cit.*, p. 62.
- 27) 森松健介訳, *op. cit.*, pp. 51–52.
- 28) John Fowles, *op. cit.*, pp. 28–42.
- 29) T. R. Wright, *Hardy and the Erotic* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1989), p. 133.
- 30) Helmut E. Gerber, ‘Hardy’s *The Well-Beloved* as a Comment on the Well-Despised’, *English Language Notes*, 1 (1963), pp. 48–53.
- T. R. Wright, *Hardy and the Erotic*, p. 133.
- 31) Richard H. Taylor, *op. cit.*, p. 164.